空の彼方

ゆぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の彼方

【Ｎコード】
Ｎ０８８６Ｂ

【作者名】
ゆぐ

【あらすじ】
幸福は不幸を導かない。不幸も幸福を導かない。自分で、自分が羽ばたく空を探す。それが、一番の幸福なんだよ。それが、航空学校に通う僕の思い。

プロローグ

世の中は矛盾に満ちている。
何が正しいかなんて分かったものじゃない。
だから、僕たちは自分で空を見つける
いや、見つけなきゃいけないんだと思う。
自分が羽ばたくための空を――。

「うわぁ～！落ちる～！！」
「バカ！ハンドル切れっ！上昇しろ！っていうか貸せ！」
ゴーグルをかけた少年は、そう叫ばれ、強引に同じくゴーグルをかけた女性にハンドルを奪われた。
二人の乗った機体は、みるみる上昇し、無事軌道に乗ったようだ。
「ここは、上昇気流が少ないから落ちやすいって言っただろ？」
「ご、ごめんなさい…」
女性の厳しい一言に少年は肩をすくめてしまった。
　しばらくして、二人は海の上にある“ホープ飛行学校”に着いた。
「センセー、やっぱりハルトは駄目だぜ？俺が言うんだから間違いないよ！」
「あら、サツキは女の子なんだから自分のことは私って言いなさいって言ってるでしょう。それとハルト＝スターチェ。あなたは成長しませんねぇ…。お兄さんはあんな立派だというのにね、ねぇ、サツキ？」
センセーと呼ばれた女性はハルトとサツキを交互に見比べた。
「ば、バカ！何言ってるんだよ！てか俺に振るな！」

サツキは真っ赤になって叫んだ。
「あら…、サツキはまだ、タクトと付き合っていたの？」
突如、後ろからくすくす笑いと共に声が聞こえた。
「うっ…マイ！お前には関係ないだろ！」
「はいはい…、それにしてもタクトはなんでこんな男、いや女を好きになったんだか…」
マイが、サツキをからかっている中、ハルトはおずおずとセンセーと呼ばれた人に話しかけた。
「ハティル先生…、僕やっぱり航空科を続ける自信がないです…。お兄ちゃんみたいにはなれないよ…」
「ハルト＝スターチェ、確かにあなたは航空科を選択してから半年が経つけど、成長していないわ。ミスも多い」
ハティルのきつい一言にハルトは、気落ちしてしまった。
「でもね…、私はあなたにもお兄さんと同じような才能が眠っていると思うのよ。私の勘だけど、間違いないわよ」
ハティルは、ハルトの優しく微笑みかけた。
「ハティル先生…」
「ふふっ、さぁ実践練習も終わったしお昼ごはんよ。マイ、サツキ！ほら、あなた達も一緒に食堂に行きましょう？」
二人はいがみ合っていたが、名前を呼ばれお互いに、「ふん！」といって別かれていった。
「女は恐いな…」
ハルトは、ぼそりと呟いた。

「ふふ、ふん～♪」
僕は昼食を終え、野外の丘でゴーグルを磨いていた。
このゴーグルは、お母さんからもらった形見。飛行機に乗るとき風で視界が邪魔されないようにって…。
「へへっ！」
きれいに磨けたゴーグルを見て、僕は笑った。

お父さんからもらった工具箱と、ピカピカのゴーグルを横において僕は寝転がった。
風が気持ちいい。日差しが眩しい。
空は僕に色々な顔を見せてくれる。だから、いつ見ても飽きないんだ。
僕の名前は、ハルト＝スターチェ。ホープ飛行学校の航空科に通う２年生。この国では１０歳になると、それぞれ将来就きたい仕事に関する学校に入り、勉強して卒業後はそのまま国から仕事が与えられる。そんな中で、僕が通ってる飛行学校って言うのは、主に空に関する勉強をすること。科目は主に、航空科、航空科学科、航空観光科、航空電子科など、とにかく空に関することばかり。
その中でも僕が専攻したのが、飛行機で空を飛ぶ航空科。色々ある科目の中では、難易度も高く危ないので選考する人は少ない。でも僕は、お兄ちゃんに惹かれて航空科を選んだ。僕のお兄ちゃんは飛行学校航空科をトップで卒業して今は、ティーア飛行会社で働いている。ティーア飛行会社は、政府とのつながりもあってとっても大きな会社だ。そこでも、新人ではトップの成績らしい。
まだ、空は飛ばせてもらえないみたいだけどね。
「おーい、ハルトー！休み時間終わるぞー」
遠くから声が聞こえたので、僕は体を起こして声の出所を見た。
サツキだった。
「わかった！すぐ行くよ！」
僕は丘を、走って駆けていった―。

第1話　ホープ飛行学校

「飛行機の原型は、今とはかなり違うものであった。それは、人自身が空を飛ぶというものである。しかしこの方法だと身の安全も保障できなく…」
先生のくだらない講義が続く。
昔の飛行機がどんなものでもいいんじゃないの？と、ハルトは内心で考えていた。
正直、この飛行史の時間が一番退屈だ。昔の話を聞いてもためになるもんじゃない。
今の、最新の科学技術の話をしてほしいものだ。そういえば、“リピオド”がまた新しい粒子を発見したってサツキが言ってたな。これを機会にまた飛行機が変わるのかな。屋根がついちゃったりとかするのかも…。楽しみだなぁ。さすが最新の科学研究所だよなぁ。
「こらっ、ハルト＝スターチェ！話を聞いているのか！？」
「は、はいっ！」
先生の突然の声に僕は驚いてしまった。飛行史の先生は一番厳しいんだ。
「まったく…、お前のお兄さんは私の講義から目を離したことなどなかったのに…」
まただ。またお兄ちゃんと比較されてる。確かにお兄ちゃんは頭が良くて格好良くて、なにより飛行技術においては、右に出るものはいなかったけど…、僕と比べなくてもいいじゃないかと心のそこで毒づいた。
「みんなも聞いておけ。飛行史は見た目は確かに地味であるが、実は寛大で雄大で奥が深く…」
遂に飛行史の授業の授業みたいになってしまった。さすがに、これでは勉強も何もあったもんじゃない。航空科と航空機械科の合同授業だったのだが、もうみんなやる気をなくしてしまった。

2年と3年の合同授業でもあるので、サツキもいるが、端の方に座ってパンを食べているようだ。
さっきお昼ごはんを食べたばかりなのに…、と思いつつも自分もお腹がすいてきたので、羨ましかった。

あれから数十分の講義の後、終了のチャイムは鳴った。
授業が終わると、すぐにサツキが駆けてきて、僕に話しかけた。
「あのセンコーが言ったこと気にしなくていいぜ」
「どういうこと？」
僕には意味が良く分からなかった。
「お前の兄ちゃん、タクトは、いっつも飛行史の授業はつまらなかったって言ってるからな。いつも隠れて飛行機の本読んでたってよ。あいつらしいぜ」
え、そうなんだ！お兄ちゃんでもつまらない授業だったんだ。僕は心が軽くなった。
「おーい、サツキー。次に授業に遅れるよぉー」
「分かった、今行く！」
3年生の、アカネがサツキを呼んでいる。
「じゃあ、また後でな！」
サツキは、そう言い残して走っていった。
そういえば、次は2年と3年は別の教室だっけ。
サツキは今3年生で、僕より一つ年上の先輩なんだ。
「やれやれ…、毎回この授業は欝だよな」
ハルトと同じくらいの背格好の少年が、ため息混じりに話しながら歩いてきた。
「レン！やっぱり、君もそう思う？」
彼の名はレン＝リガート。同じ2年生だが航空機械科を専攻している。
「あぁ、全く役に立てられないよね」
レンは困ったように笑いながら話した。

彼は、1年生からのハルトの友達だった。常に冷静で正しい判断をしてくれるレンはハルトにとって、いつも頼りになる存在だった。
彼が機械科を専攻するときは、ハルトもそうしようかと思っていた。事実、ハルトは飛行機の操縦よりも機械いじりの方が得意で、実技なら航空機械科の上級生と同等かそれ以上なのだ。それには訳があり、小さい頃から父親によく教えてもらっていたのだ。お父さんはお兄ちゃんにも教えようとしたけど、お兄ちゃんは飛行機のことばかりで全然話なんか聞いていなかった。それで、二人で喧嘩になることもあった。逆に僕は機械のほうが好きでどんどん腕も上達していった。しかし、お父さんは、2年前お母さんが病気で死んでから急に失踪。今も行方が分からない。だから、ハルトはお父さんからもらった工具セットをいつも大切に持ち歩いているのだ。
「ホントに、早く飛行機の修理したいなぁ～」
横から、レン、ハルトより少し背の低い少女が現れた。
「カナ。お前はまず工具類の名前から覚えろよ」
横からレンが口出しする。
彼女はカナ＝フローゼ。同じ2年生で航空機械科専攻。
機械大好き少女というちょっと変わった女の子だがいつも明るくて、ハルトもよく一緒に話している。
「そうだな～。ハルト君が教えてくれたら頑張って覚えるかも…」
そういって上目遣いで僕を見てきた。
普通の男ならこれで悩殺されるだろう。カナは見た目も可愛いからだ。
でも、僕はこういうタイプが少し苦手。体から抵抗組織が現れ、僕の脳を占拠してしまう。
生まれついての本能なのだろう、少し残念だ。
「カナ。そんな事言ってないで、急がないと間に合わないぞ」
レンが時計を見て言った。
「そんなことって何よー！私には大事な・・」
そう言いかけてカナはレンに連れ去られてしまった」

なんだかんだいてやっぱり、二人はいいコンビである。
「やば、僕も遅れるよ！そういや、航空科の2年は僕一人だった！」
僕はそう叫んで、教室を後にした。

次の時間は「化学」。
航空科の2年と航空科学科の2年の合同授業である。
言っては何だが、僕はこの教科が好きだ。と、いうより僕は実技科目が好きなのだ。
化学なら実験がある。自分に何かを残すことができるからだ。そして、先生は時々科学の最先端技術の話もしてくれる。いわゆる「科学」と「化学」の授業なのである。
「よお、久しぶりだな。ハルト。」
そういって、隣の席の少年がハルトに声をかけた。
「久しぶり、ワタル。航空科は化学は週に一回だからね。」
彼の名はワタル＝ラーベガ。科学科専攻の2年生。学年きっての優等生。去年から、その頭脳の高さは評価されていた。そして難関な科学科を専攻したのだ。しかし、見た目は普通の学生といって感じで、とても付き合いやすい。ハルトはワタルのそう言うところが好きだった。また、時々最新の科学の話をしてくれるので、それがとても楽しみだった。
「ねぇ、ワタル。リピオドが新しく発見した粒子って知ってる？」
「あぁ、科学科では凄い話題だよ。今回はマジで凄いらしいぜ」
ワタルは興奮してハルトに話した。ワタルは科学の話になると顔つきが変わるのである。
「え、どんなの？どんなの？屋根のついた飛行機が作れるとか！？」
「落ち着け。最初からそんな細かいところまで分かんなないよ」
そんな細かいところといわれたので、ハルトはすこしカチンときたがそのまま話を聞いていた。
「いいか…、新しく発見した粒子はな…応用すると…」
ワタルがいかにも勿体つけて話している。

「死者が…蘇るって話だ」
あまりにも唐突で、抽象的だったのでハルトは戸惑った。
「死者が…、蘇る！？いったい、どういうこと？」
「こらっ！そこの二人！静かになさい！」
僕があまりにも大きい声で話すので先生に怒られてしまった。
そして、ワタルが僕の耳で囁いた。
「詳しくは、まだ何も分からないよ…」と。

僕は科学の授業後も新たな興奮に身が震えた。
1日に2回怒られたことなど、もはやどうでもよかった。

第2話　空へ

「ふわ～っ」
僕はあくびしながら、自分の部屋に向かって歩いていた。
ここは寮生なので、みんな部屋を持ってる。
ただ、校舎からは少し遠いので歩く必要がある。
でも、僕はこの移動中に空を眺めるのが好きなんだ。
夜空に輝く一つ一つの星…。素敵じゃない？
「って、うわぁ！」
どてっ！
思い切りこけてしまった。
前からこけたので、なんとか手を着いてダメージを減らすことが出来た。
「いてて…」
空を見て歩いていたら、道端の石に躓いてしまったらしい。
「何やってんだ？こんなとこで…」
後ろから声がしたので振り返った。
「あ、ちょっと空眺めてたらこけちゃって…、へへ…。」
僕は右手で鼻の下を擦った。微妙な笑みが哀しい。
「相変わらず、ドジだなぁ…。ほら、手ぇ貸せよ」
突っ張った声で、サツキは言った。
「え？」
「起きやがらせてやるって言ってんだよ！ほら！」
サツキはそう言って、僕の右手をつかみ強引に引っ張った。
引力に逆らうように僕の体は浮き上がった。
「うおっ…っと…。あ、…ありがとう」
僕は驚きつつもお礼を述べて微笑んだ。
右手がジンジンするは、この際言うまい。
「ふん、感謝しろよ」

顔を赤めつつ満足そうにサツキが言った。
自分がやったことを最善の手段と信じて疑わない彼女らしい。
しかし、彼女は傲慢なわけではない。常に、冷静に考えて判断する力はあるし、結果も出している。彼女は飛行技術に関して言えば天才的なのだ。
ただ、こういう当たり前っぽいところが微妙にできない。
ただ、お兄ちゃんに言わせれば、「そういうところが彼女のいいところなんだよ」らしい。

その後は、二人で寮に向かい、男子寮と女子寮の分かれるところで別れた。
途中、色々な雑談をしたけど、お兄ちゃんの話は出なかったな。
今週末は会うのかな？

今日は航空科の飛行訓練実技がある。
航空科を専攻した僕だけど、まだ2年生だから授業が月に数回しかないのだ。
だから、一回一回の授業がとても楽しみである。
そして、この授業は2年生から5年生までが一緒に行うのだ。
そもそも、ホープ飛行学校は、1年生から5年生まで、学校の授業を受ける。
そして最後の一年にどこに就職するか決めたりや、今までの学校生活の総決算として、高度な実技訓練をするのだ。
だから5年生にでもなると技術はかなり高くなってくる。
「さぁ、それじゃあ実技をはじめるよ。それぞれ学年ごとに並んで！お、今日は全学年が揃うのか！楽しみだね！…1、2、3…9人！全員いるね！じゃあまず各自飛行機の確認からだ！しっかりやりなさいね！」
ハティル先生の元気な声がこだまする。

先生は、この学校で唯一の飛行学校の教師だ。まだ、若い女性だが腕は最高レベルだ。
お兄ちゃんですら、「あの人は、俺と同等か上のレベルだろう」と卒業してからも話していた。
僕は一回も彼女が飛行機を操縦するところを見たことはないが、恐らく嵐でも乗り越えられる程の腕前なのだろう。
僕たちはそれぞれ飛行機の整備に入った。航空科は全科の中で、最も人が少ない。全学年をあわしても9人である。
「おい、ハルト！整備はお前に任せるぞ。お前が得意なのってこれだけだしな」
サツキが手で口元を押さえ笑いを隠すように言った。
「分かったよ！是非、やらせて！」
僕は声を張り上げていった。
2年生と3年生は合同で2人1組をつくり、飛行機に乗るのだ。現在、3年生は3人。サツキ以外は男子生徒なのでその人たちがペアを組んでいる。しかし、余り物ということでサツキが僕と組んだわけではない。自分から志願してのことだった。
「タクトの弟なのか？よし、じゃあ俺が組んでやるよ」という感じであったと思う。他の二人の意見を聞かずに強引だったのは今も覚えている。今となってはいい思い出…なのだろうか？
「おい、サツキ！たまには自分でやれよ。後輩だからって、ちょっとハルトを使いすぎだろ！」
サツキと同学年の男子生徒の一人がサツキに向かって言った。
「あ、いいんです…。これは、僕が好きだからやっているんですから」
僕は、笑ってそう言った。
「そうか、それならいいけど…。なにか困ったことがあったら言ってくれよな」
「心遣い、ありがとうございます」
先輩の優しい一言で僕は少し嬉しくなった。飛行機の整備は確かに

僕が好き好んでやっていることなのだが気にかけてもらえるというのはやっぱり嬉しい。

みんな、飛行機の整備も済み、着替えもすまして、フライトの時を待っている。
フライトは先生が風などを確認し、無事に飛べるようになってからだ。
飛ぶコースはもちろん学校指定のコースであり、絶対安全な道である。
飛ぶ順番は、低学年からである。だから、僕達は1走目なのだ。
早速気を引き締める。航空服のボタンを留めて、ゴーグルを目にかけた。
「さて…一番目行ってきますか。準備はいいか？ハルト？」
サツキがすでにやる気満々で僕を待っている。
「おし、じゃあ先に乗り込むぞ」
そう言ってサツキは、飛行機の前部席に座った。
二人で乗るので、折り返し地点まではサツキが操縦。帰りは僕というわけだ。
「よし、じゃあ行ってきます！」
僕は先生に向かっていった。
「あぁ…、練習だからって気ぃ抜くんじゃないよ。分かってると思うけどね」
僕は先生の言葉を背に受けて、歩き出した。
「よいしょ」
飛行機の横からまたがり、後部座席に座る。そしてベルトをしっかり締めた。
「よーし、じゃあ飛ばすからな！」
サツキはそう言ってエンジンをふんだ。
飛行機は、助走を付けるために、滑走路を駆けていった。

第3話　空を飛ぶこと

ここは地上から離れた遥か上空。
大地はずっとずっと下にある。それは見えてるようで見えてない。
僕の未来のように…
「おい、ハルト！ぼうっとしてんな！」
大きな声に僕は現実の世界に戻された。またぼうっと考え事をしていたらしい。
「全く、今は空の上だってのに呑気だよなぁ…。お前の精神、そこは理解できないよ」
そうなのだ。僕はこんなに高いところにいるっていうのに、なんていうか緊張感がない。
恐怖、興奮、喜び、不安…。
飛び始めはそういう色々な感情も浮かんでくる。でも、飛んで数分もすれば気分は安泰。
“そこにいて自然”なのだ。僕が空にいるってことは、なんでもない当然なことであり、絶対的法則のような物である。
しかし、それはあくまで、空にいるというだけで、空をうまく飛ぶということとは話が別。飛行機の運転はからっきし駄目なのである。
「空をうまく飛べたらなぁ…」
僕のつぶやきは風のクラクションの中では、つぶやきにすらならなかった。
「おし、もうすぐ中間ポイントだぞ！」と、サツキが言った。
風の向こうに、中間地点を示す旗がある。旗は強風にさらされ大きなうねりを上げていた。
まだ、距離的には遥か彼方だが、なんとか見える。僕はゴーグルの中から目を利かせていた。
「あと少しだな！」
そう言ってサツキは更にスピードを上げた。

それから、間もなくして、僕たちは中間ポイントに着いた。
ここで、飛行機の整備をして次は僕が飛ぶ番である。サツキが、乗った後だから整備に問題は出ていないはずだが、念入りに行う必要がある。念には念をだ。
「おい、早く頼むぞ！後ろからも来るんだから！」
「分かってるよ！」
そう、後ろから先輩もやってくるのである。もたもたしてる追い抜かれるという展開になりかねない。
うん…、エンジンに問題なし！モーターも…大丈夫だ！
「サツキ！出すよ！後ろに乗って！」
「了解！」
サツキが乗り込み、僕も前部座席に座った。
「ハルト、思いっきりやれよ！」
サツキの呼びかけに僕は静かにうなずいた。ゴーグルをかける。安全用のベルトを締めた。
顔も引き締まる。僕はゆっくり飛行機を動かした。
最初は、静かに…。段々、音が風の指揮につられるようにリズムを取り大きくなってゆく…。
遮るものは何もない。最後にはその全てを放出するだけである。
ぶるぶるるるるる…――！
抗体は大きな音を立て、一瞬というときを何回も経て大空に舞い上がった。
これだ…、この浮く瞬間に、僕は興奮を覚える。自分が先ほどまで踏みしめていた大地を、離れる感触…。
「気持ちいい…」
つぶやきではあった。でも、しかしさっきのつぶやきとは、風の共感の仕方は違う。
僕に賛成するように呼応する。僕は空を飛んでいるのだ。

そう、気がつくと抗体はすでに遥か上空。僕は、飛行機の操縦を続けていた。
「ハルト、うまいじゃないか！その調子だよ！」
サツキの声を背に受ける。僕は、はっとして我にかえった。
その刹那だった―
僕の手がハンドルに触れているという感触を得た刹那―
ガタンッ、そう叫び抗体は突然傾いた。
「うわぁ！」
「くっ…バカ！何やってるんだよ！早く、戻せ！」
サツキの声が後ろで聞こえる…。何故だが僕は、冷静になった。どこかに魂を置いてきた感じだ。
そして、脳内に何処かの記憶が、映像となり現れた。
「いいか、ハルト…。空を飛ぶって言うのは、飛行機を支配することじゃない。空を支配することじゃあない。競争をして誰かに勝つことでもない。言うなら、ハンドルを握ることでもないんだ。飛行機と空と自然と…そして自分と…全てをひとつにしろ。それに身を委ねるんだ」

お兄ちゃん…？

再び、僕はハッとした。現実の世界だ。
「ふぅ…、なんとか持ち直したか…。ハルトー、危なかったぞ」
そうだ、僕は確か…飛行機の操縦に誤って…。
でも、今はいい状態で飛行している…。
お兄ちゃんが…、
「助けてくれたんだ」
僕は、今飛行機と空と…全てと一体化になっている。
もう、それは感触とかそんなのじゃなくて…
“飛んでいる”ってこういうことなんだね…。
僕は、ひとりそう思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0886b/

空の彼方

2010年10月23日01時47分発行